
これが噂のファンタジー

結崎明帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これが噂のファンタジー

【Nコード】

N8581Q

【作者名】

結崎明帆

【あらすじ】

異世界転生。

極度な美少女顔だけが特記事項の平凡男子、白木優綺（15）の人生が変わった。

そこは魔法、剣、魔物がはびこる、噂のファンタジーという世界だった。

異世界トリップ（前書き）

結崎明帆共々、宜しくお願いします。

異世界トリップ

白木優綺しらかぎ ゆうき、その少年の16年という歳月は平凡だった。

武術、スポーツに長けている訳でも無く、特段、勉強が秀でている訳でも無い。

特記事項があるとするれば、極度の女顔と言っただけだろう。

しかし、それを除けば、白木優綺は平凡と言う層のと真ん中を生きる、平平凡凡な日本国民の1人でしか無かった。

その日を迎えるまでは。

優綺は目を疑った。

辺り一面、白、白、白。まるで影が無い。

遠近感と言う概念すらない、この空間は優綺には些か不気味だった。優綺は考えた。

うんうんと唸り、頭を抱え、何故此处にいるのか、記憶を搾り出す。しかし、全く記憶が浮かばない。

昨日も一日、特に何かしたでも無く寢床に就いたはずだ。

優綺は再度、再三そう確認すると、じわりと恐怖を感じ始めた。

まだこれは夢の続きか、幻覚か、果ては死後の世界か。

多種多様な結論が優綺の脳内を駆け巡る。

いづれにせよ、この状態はマズイのでは？優綺のとりあえずの結論が決定した時、その人物は現れた。

「猪狩先生。」

突如、この空間に現れたその男に優綺は目を丸くした。
なんと、その猪狩とは優綺の通う中学校の担任教師だった。

「白木、お前死にたいか？」

優綺、二度目の驚愕。

猪狩は優綺の通う中学では温厚な教師として知られている。
その教師から、死ぬか？など猟奇的な言葉が発せられたのだから、
驚くのも無理は無い。

「猪狩先生。…あなたがどうしてこんな所に？」

「俺は死にたいか、と聞いているんだ。答える。」

これでは会話が成り立たない。

それに、20代前半の一介の新米教師が放つ言葉では無い。
優綺は猪狩の醸す雰囲気には圧され、訳も分からないまま「生きたい
です。」と答えた。

猪狩は、その答えを待っていた。とばかりに笑みを零した。

「猪狩先生。あなたは一体何なんですか…？この空間は一体…？」

本能が直接教えてくれる、この猪狩という人は何かを知っていると。
優綺は確信していた。

そして、猪狩が次に放つ言葉は優綺を更に驚愕させた。

「俺、実は神様なんだよね。」

流石にこれには声が出ない優綺。

そんな優綺の反応が面白かったのか、猪狩はご満悦な様子で言葉を続けた。

「勝手に悪いんだけど、白木には別の世界に行ってもらうから。」

「えっ？ちょ！ちょっと待って？よく分からない？何がなんだかサッパリ…説明して下さいよ？」

堪らず声が大になる優綺。

「何を？」と猪狩は目を丸くしたが、すかさず「全部ですよ？」と叫ぶ優綺。

「面倒だな…。じゃあ、まず転成することから説明する。」

優綺はとりあえず頷いた。

「お前は、元々お前の居た世界に生きる筈じゃなかったんだ。…分かり易く言えば…生まれ間違えたってヤツだな。」

「そんな事が…本当に…？」

「とりあえず聞けよ。」と促す猪狩。

優綺はコクリと頷いた。

話が支離滅裂だが、こんな空間に居るのだから、全ての話が優綺には現実味のある話に聞こえた。

「俺は神としてお前をこの世界から削除しなければならなかった。もしくはお前が生まれるべきだった世界に還すか。勿論その二択はお前に選択権がある。…まあその話はもうしたけどな。」

「なるほど…。だからあんな質問を…。でも、全部夢みたいだ。」

猪狩は、「当たり前だ。」と優綺を笑い飛ばした。

「さて…もういいな？」

「…はい？」

猪狩は満面の笑みを浮かべていた。
まさか…。優綺の背中に悪寒が走った。

「いつてらっしゃい。」

「ちょ、まだ何も聞いてな…あああああ？」

優綺は何処かに吹っ飛んで行った。

最後に優綺が見た猪狩の表情は悪魔さながらだった様だ。

遭遇

激しい頭痛で優綺の意識は覚醒した。
もうだいぶ意識を失っていた様だ。

「ここは…？」

立ち上がり、土を払う。

優綺は昨日寝たままここに連れられて来たので、スウェットのままだ。

肌寒いことは感じられないが、靴が無いのが痛い。

優綺は辺りをキョロキョロと見回した。

鬱蒼と木が生い茂っている。

枯れ葉のカーペット、太陽光を遮る葉のドーム。

ここは誰が見ても明らかに森だった。

「綺麗な森だな。」

優綺はそう呟くと、スウェットのポケットに入れておいたゴムで後ろ髪を束ね、ポニーテールにした。

優綺は極度の女顔のクセに、長髪を好んでいる。

サラサラとしたこの黒長髪と、並大抵の女では敵わない程の優綺の可愛い女顔があれば、大抵の男は惚れてしまう。

そのせいで、優綺は男に迫られた事もたまに、いや、しばしば、いや、だいぶあったがもうそれにも慣れてしまった様だ。

何も無い森に、可憐な少女＞少年＜が一人。

優綺はしばらくポツンと立ち尽くしていた。
しかし、それも長く続かなかった。

「なんだこの音…？」

静寂に包まれていたさっきまでの様子が嘘の様。

木々が折れる音、獣の甲高い鳴き声、爆発する様な轟音。

音は優綺よりだいぶ遠くに位置する場所で発生しているが、それでも辺りは喧騒に包まれた。

優綺の意識が弓の弦の様に、ピン、と張り詰める。

「獣がいるのか…？それも、この騒音…狼や熊じゃ済みそうもないぞ？」

じわり、と背中を嫌な汗が伝う。

しばらくすると、優綺は大変な事に気付いた。

「まさかこの音…俺に近づいてる？」

その時だ。

優綺の一番近くに生えていた巨木が、根元を残し、吹き飛んでいった。

バリバリと木が破壊される暴力的な音が辺りに轟く。

あまりに突然の事で、優綺はステンと転けてしまった。

何だなんだ？と飛び上がる優綺。

優綺は現実を目の当たりにして、声を失った。

瞳は恐怖に揺れ、身体は自然と震えてしまう有様だ。

「なんなんだよコイツ？」

熊型の獣が、悠々と立っている。

しかし安易に熊などと生易しく表現できないそれは、恐怖をそのまま具現化した様な風貌だ。

鯨の様にギョロリとした瞳。

熊の様な体躯に、ビッチリと隙間無く生えた真紅の鱗。

そして何よりも目を惹かれてしまうのが、その両腕に生えた爪。

鋭利な刃物の様にぎらつくその爪は、長く、その獣の体躯の半分程もある。

やはり、図体もデカく、およそ体長三メートルは下らないだろう。

そして、その化け物が今、優綺の目の前に立っている。

優綺は恐怖を原動力に、震える足を叱咤し、走り出した。

バクバクと高鳴る心臓を抑え、初めて目の当たりにした”恐怖”から逃げる、逃げる。

程無くして、辺りが再び轟音に包まれた。

あの化け物が吠えた様だ。

優綺の心臓がまた、ドクリ、と心拍数を上げた。

――ヤツが、自分目掛けて駆けてくる…？

助っ人

「うわっ？」

優綺の頭の少し上を、轟音をたてて爪が通り過ぎていく。

堅固な巨木がまるでバターの様に切れた。恐ろしい程の斬れ味だ。しかしそれにゾツとさせる暇も無く、獣は雨霰の様に、優綺に爪を振り落とす。

爪が当たる寸での所で、優綺は木々に飛び移った。

元より運動神経のある優綺にとって、木登りは容易だ。

優綺は機動力では到底敵わないと直感し、空中戦を選んだのだ。最も、優綺の勝機は0だが。

「なんだよこの化け物っ……？猪狩先生いつかぶっ飛ばしてやる……？」

毒づいたその時、獣は大きく口を開け、優綺を真っ直ぐ捕捉していた。

口内が鈍く、光っている。

優綺は、まさか、と思いつつ、別の木の枝に飛び移る準備をした。

「まさかアイツ、ビームでも射つんじゃないだろうな？」

獣の口内の光が最大になった瞬間、優綺のいた木の枝が力無く、吹っ飛んでいった。

あまりの風圧に、着地失敗で地面に叩きつけられた優綺。衝撃に呻いたが、意識は手放さなかった。

優綺の目の前に聳え立つ、名前も分からない大獣。

それは、しめた、と言わんばかりに、爪を舐めていた。
万事休すとはまさにこの事。

流石に優綺はこの時ばかりは自分の運命を呪った。
訳も分からないまま、異世界に強制的に飛ばされ、着いてみればこの有様だ。

当然と言えば、それは当然。

理不尽極まりないこの状況で、優綺が理解できるただ一つの事。
それは、自分は死んでしまっんだ、という真っ黒な事実。

優綺の頬を涙が伝った。

ポロポロと零れるそれは、生きたい、と切に願う感情の塊。

そして、無慈悲にも天高く振り上げられた、その剛腕。

優綺は、ゆっくりと目を閉じ、この世に別れの言葉を告げた。

「アトランティスの豪槍？」

思いがけなかった、第三者の登場。

獣がけたたましい音と共に、吹き飛んでいった。

停止

「こつちに早く来て下さい？」

怒号が飛び、優綺の肩がびくりと跳ねた。
ソプラノの声は、森中によく通った。

遠くに優綺と同じ年位の少女が立っている。

少女はグレーのローブにレザーブーツ、そして何より目につく蒼髪と、なんとも奇っ怪な格好だ。

そして、その右手には長さ70センチ程の空色の棒切れがシッカリと握り締められている。

「早く？」

もう一度、少女の声が響く。

優綺は慌てて駆け出した。

少女の元へ。

優綺の遙か後方で、獣が再び吠えた。

「我、求むるは清き豪なる力。我、与うるは命の心……。」

駆ける優綺。

唱える少女。

追う大獣。

そして、ついに大獣は優綺に追いついた。

「その人？伏せて下さい？」

優綺は転がる様にその場に伏せた。

「上級水魔法、ポセイドンの戦斧？」

バキバキと、緑のドームが音を立てる。

遙か頭上より押し寄せる、大量の水の奔流。
その迫力はまさに圧巻。

「魔法…？ すごい？」

優綺はこの非現実的なこの光景を面白いくらい受け入れていた。
なにせ見た事も無い化け物を目撃した事と、死を間近で体感した事
により、感覚が研ぎ澄まされているのだ。

そして、強力な魔法が獣の脳天に降りそそぐ。

――と言う事は無く、水魔法は明後日の方向に落撃した。

「…あ。」

「…え？」

優綺は意味が分からず、少女の顔を盗み見た。

そこには、冷や汗たっぷりの少女の顔。

今にでも「しまった」と、叫びそうな表情。

優綺は程無くして、直感した。

ああ、失敗したんだ、この人。と。

そして、あろう事が、少女は震える声でとんでもない事を口走った。

「ど…っ、どどどどどうしようっ。私、魔力切れちゃいました。」

バカかこの人おおおおおおお？

優綺は思わず心の中で、思い切り叫んだ。
初めてこの世界に来た優綺でも分かった。

魔力切れとは、もう魔法が使えない事を意味する。
故に今、優綺と少女は丸腰状態。
まさに、絶対絶命。

呆気を取られている獣もじき、二人を捕食すべく動き出すだろう。

「もっと小さい術を小出しにするとか、無かったのかよ？」

「あわわわわわわ…。」

少女はパニック真っ只中だった。

そして、流石に焦りが極限にきた優綺。

もう抵抗の術がこちらには無い。

それを悟った獣はその巨体を揺らし、一目散に駆けてきた。

目標は蒼髪の少女。

少女は腰を抜かしていた。

「危ない？」

優綺も少女に駆けつける。

どうせ行っても敵わない、が、優綺は本能的に少女の救出に向かった。

そして、獣より一步早く、優綺は少女の目の前に躍り出た。
手を広げ、少女の盾になる優綺。

「殺るなら殺れや熊野郎…？」

まさにとどめ、と言わんばかりに獣は大爪を振り立てた。

そして、現在優綺は本日二度目の走馬燈中だ。

死を意識すると、周りがスローモーションに見えると、よく言われるが、優綺はそれを今、身をもって体感した。

獣の動きが、次第に遅く、遅く。

優綺は自身の感覚が研ぎ澄まされている様は感じた。

そして、更に獣の動きが遅く、遅く、遅く…

――…止まった。

優綺の首元で、爪の動きが完全に停止した。

目をパチクリさせる優綺。

何が起ったのか、これは全く分からない。と言いたげな表情だ。

優綺は、とりあえずその場を離れてみた。

獣は一向に動かない。

「あのっ…。」

「うおっ？」

未だに少女は腰を抜かしていた。

「これは一体…。あなたは魔法使いだったんですか？」

「俺じゃねえよ。」

優綺も緊張が途切れて、その場へたれこんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8581q/>

これが噂のファンタジー

2011年2月23日20時53分発行